

北海道の海獣観察プログラムの現状と課題

宇仁義和

093-0006 網走市南 6 条東 5 丁目 6 番地, ユニス: 宇仁自然歴史研究所

Marine Mammal Watching Programs in Hokkaido and their conditions and subjects

UNI Yoshikazu

UNIS: Uni's office of Nature-human Interaction Studies, Minami 6 -Higashi5, Abashiri, Hokkaido 093-0006, Japan.
unisan@m5.dion.ne.jp

I made a compilation of marine mammal watching activities around Hokkaido in 2000-2003. Fifteen activities were listed by location, observation way, species, month, onset year, guideline, operator, fee (one adult). The activities consisted of seven regular services by ship, three liner routes or pay facilities able to watch, and five watching locations out of services. Most of these watching activities were on set in 1990's but Sea lion watching in 2003. These activities were still in deficient status. Number of sighting species were 15 i.e. 10 whales: Minke whale, humpback whale, Dall's porpoise, harbor porpoise, Pacific white-sided dolphin, bottlenose dolphin, short-finned pilot whale, killer whale, Baird's beaked whale, sperm whale; 4 pinnipeds: largha seal, Kuril seal, ribbon seal, Steller sea lion; and sea otter. Minke whale, Dall's porpoise, harbor porpoise, Pacific white-sided dolphin, and largha seal were most common species. To enhance the activities it should be integrated sea use planning and coordination including both of fisheries and another activities as marine mammal watching and should be made restriction of marine mammal fisheries especially dolphin hapoon fishry in the watching grounds.

はじめに

ホエールウォッチングやイルカ観察、アザラシ観察などの海獣観察プログラムは、観光立県をめざす北海道において今後の発展が期待される「観光関連ニューサービス」(北海道未来総合研究所1999)として位置付けられる事業である。そこで、北海道沿岸の海獣観察プログラムの現状を調査し、将来への課題を考察した。

なお、本論では形態を問わず海獣の観察行為をすべて含んだ意味で「海獣観察プログラム」を用い、海獣観察を主目的とした定期有料プログラムを「海獣観察事業」と呼ぶ。

内容と方法

2000年から2003年の間に観察プログラムの実態調査、事業者や海獣研究者からの聞き取り、そして文献や資料調査を実施し、北海道の海獣観察プログラムの現状をまとめ課題を抽出した。調査項

目は、観察場所、観察方法、おもな観察動物、観察月、開始年次、観察ルール、観察事業者、料金(大人1名)の8項目であり、実態調査ではビデオにより記録した。聞き取りと資料調査では、事業の歴史、その他の観察事例、漁業規則の収集を行なった。

海獣観察プログラムの実施形態は様々であることから、本論では1)海獣観察を目的とした定期有料事業(=海獣観察事業)、2)海獣観察が可能な定期航路および有料施設、3)事業未実施の海獣観察適地の3つに区分した。1)の事業はいわゆるホエールウォッチングなどの海獣観察を目的とした有料プログラムを指し、海獣観察を事業名称に掲げていなくとも実態として主目的となっている事業も含めた。2)は定期航路や観光施設などのうち海獣観察が高確率で可能な有料サービス。3)は有料事業が実施されていない観察適地を示した。ただし数頭程度の上陸場は除外した。

調査対象となった海獣観察プログラムは1) 定期有料事業が噴火湾(室蘭市), 厚岸湾(厚岸町), 野付湾(別海町), 根室海峡(標津町), 根室海峡(羅臼町), 知床(ウトロ側) 1(斜里町), 神威岬(積丹町)の7か所, 2) 観察可能航路・施設は襟裳岬(えりも町), 知床(ウトロ側) 2(斜里町), 網走沖氷海(網走市)の3か所, 3) 事業未実施の観察適地は風蓮湖(根室市), 能取岬(網走市), サロマ湖水(常呂町), 抜海漁港(稚内市), 雄冬岬(増毛町)の5か所, 合計15か所である(カッコ内は出港地または観察地が位置する自治体名)。なお, 複数の事業者が同一の場所で実施の場合, 個所数は1か所, 事業者はその数とした。

結果

観察場所と事業者区分

調査対象のうち, 定期有料事業7か所の地域区分は, 道南は噴火湾1か所, 道央は神威岬1か所, 道北はなく, 道東は残り5か所が含まれ, 現在の北海道の海獣観察事業は道東に集中していた。海獣観察が可能な定期航路や施設の所在, 事業未実施の海獣観察適地の所在も同様の傾向を示し, 海獣観察の中心は道東, なかでも根室海峡から知床半島周辺がその中心であった(図1)。

海獣観察事業者の区分は, 厚岸湾と野付湾の事業者が第三セクターであるほかは民間企業であった。観察可能航路・施設は襟裳岬がえりも町直営, 他の2か所(知床2及び網走沖氷海)は同一の民間事業者である。

観察方法

海獣観察の方法は, 船舶を使用するものと陸上からの観察に2分される。船舶を使用するプログラムは船舶の種類により, 観察船, 遊覧船, 観光船, 磯舟の4つに細分した。観察船は展望デッキを備えた船舶, 遊覧船は客室を備えた船舶, 観光船は調査対象中の1事業者が使用する400t級の船舶, 磯舟はキャビンのない船外機船である。

定期有料事業は観察を目的に出船するが, 噴火湾と根室海峡(羅臼)及び知床1は観察船が運行, 野付湾と根室海峡(標津)は遊覧船, 厚岸湾と神威岬は磯舟での運行であった。観察可能航路・施設では, 襟裳岬は建物から望遠鏡での観察, 知床1と網走沖氷海は同一の400tクラスの観光船を使

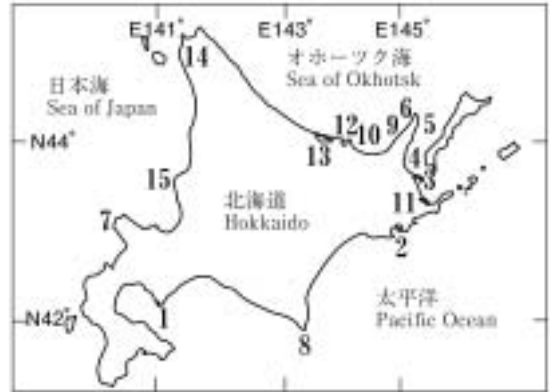


図1. 北海道の海獣観察プログラムと観察適地. 図中の数字は表1の番号に対応する. Fig.1. Marine Mammal Watching Program and Watching point around Hokkaido. Figures are respond to the numbers in table 1.

用している。事業未実施観察適地のうちサロマ湖と抜海漁港は岸から肉眼または双眼鏡で観察可能で, 風蓮湖と能取岬, 雄冬岬はシーカヤックなど船舶からの観察が可能である。

観察動物と観察月

鯨類の観察種数が多かったのは噴火湾と根室海峡であった。噴火湾では, 事業者パンフレットによると鯨類18種が見られると記されているが, 普通に観察されるのはミンククジラ, カマイルカ, イシイルカ, ネズミイルカ, ハンドウイルカ, コピレゴンドウ, シャチの7種で(笹森私信), シロイルカは1991年の1回のみ事例である(室蘭鯨・イルカウォッチング実行委員会1993)。アカボウクジラとオウギハクジラの洋上識別, 熱帯から亜熱帯海域に分布するオキゴンドウ, 太平洋には分布しないマゴンドウの観察は疑問である。根室海峡(標津)での普通観察種はミンククジラとイシイルカ, ネズミイルカ, カマイルカの4種, 根室海峡(羅臼)ではシャチが加わり5種が普通に観察される。なお, シャチの観察が普通にされるようになったのは, 根室海峡(羅臼)と知床半島沿岸では2000年以降, 噴火湾では2001年以降のことであり, 注目される。

鯨類の観察時期は5~10月で, 噴火湾では7~9月, 根室海峡では6月が観察機会のピークとなる。なお, 根室海峡(羅臼)でのマッコウクジラは, 海峡を北上する姿が陸からも観察されている(中川私信)。

表 1. 北海道沿岸の海獣観察プログラムと観察適地 (2000-2003年).
Table 1. Marine Mammal Watching Programs and Watching point around Hokkaido, 2000-2003.

No.	場所 Location	観察方法 Observation way	おもな観察動物 Species	観察月 Month	開始年次 onset year	観察ルール Guideline	観察事業者 Operator	料金(大人1名) Fee(one adult)*1	備考 note
海獣観察を目的とした定期有料事業 regular service of marine mammal watching									
1	噴火湾	観察船*2	ミンククジラ, カマイルカ, イシイルカ, ネズミイルカ, ハンドウイルカ, コビレゴンドウ, シヤチ(少), オットセイ	5~8月	平成4年	自主制定	(株)エルム	6,000円	平成2~3年に試験運行
Funka bay									
2	厚岸湾	Watching boat*2	Mink whale, Pacific white-sided dolphin, Dall's porpoise, harbor porpoise, bottlenose dolphin, short-finned pilot whale, killer whale (few), northern fur seal	May-Aug.	1992	Self regulation	Private company	\$ 54.5	test cruise in 1990-1991
3	野付湾	Outboard	ゼニガタアザラシ	5~10月	平成10年	自主制定	厚岸町観光公社	5,000円	平成5~9年に試験運行は
4	根室海峡(網走)	遊覧船	ゴマフアザラシ, ゼニガタアザラシ(少)	May-Oct.	1998	Self regulation	Public company	\$ 45.5	test cruise in 1993-1997
5	根室海峡(羅臼)	遊覧船*3	ミンククジラ, イシイルカ, ネズミイルカ, カマイルカ, サトウクジラ(希)	4~10月	昭和37年	なし	別海町観光開発公社	1,400円	
6	Nemuro strait (Shibetsu)	Sightseeing boat*3	ミンククジラ, イシイルカ, ネズミイルカ, カマイルカ, サトウクジラ(希)	4~10月	平成6年	自主制定	(有)千島観光汽船, シーアウオウツチ	7,500円	千島観光汽船は2002年より運行休止, シーアウオウツチは2003年事業開始
7	Nemuro strait (Rausu)	Watching boat	Mink whale, Dall's porpoise, harbor porpoise, Pacific white-sided dolphin, humpback whale (rare)	April-Oct.	1994	Self regulation	Private companies	\$ 68.2	operator changed in 2003
8	知床(ウトロ側)1	観察船	春~秋: ミンククジラ, イシイルカ, ネズミイルカ, カマイルカ, シヤチ, ツチカヅラ, マッコウクジラ, トド; ゴマフアザラシ, カラカアザラシ, トド	通年	平成8年	なし	(株)まるみ, ゴジラ岩観光	4,000~10,000円	(株)まるみの自然観察船の事業開始は1990年代なかば
9	知床(ウトロ側)2	観察船	Spring-autumn: mink whale, Dall's porpoise, harbor porpoise, Pacific white-sided dolphin, killer whale, Baird's beaked whale, sperm whale, winter: largha seal, ribbon seal, Steller sea lion	year-round	1996	None	Private companies	\$ 36.4-90.9	onset of sightseeing cruise in early 1990's by one operator
10	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド	4~10月	平成7年	なし	ゴジラ岩観光, ほが整社	3,000~8,000円	
11	網走沖流氷	遊覧船	Dall's porpoise, Pacific white-sided dolphin, killer whale, Steller sea lion	April-Oct.	1995	None	Private companies	\$ 27.3/72.7	
12	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	11~5月	平成14年	自主制定	(株)ゼムハウス	1500, 3000, 7000円	ダイビングガイドは10年以上実施
13	網走沖流氷	遊覧船	Largha seal, Steller sea lion, northern fur seal (rare)	Nov.-May	2002	Self regulation	Private company	\$13.6, 27.3, 63.6	Fun diveguide more than 10 years
海獣観察が可能な定期航路および有料施設 Liner routes or pay facilities able to watch marine mammals									
14	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	通年	平成9年	なし	えりも町「風の館」	500円(入館料)	他にシーカヤックでの観察事業あり
15	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	year-round	1997	None	Municipal museum	\$ 4.5 (admission)	
16	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	4~10月	昭和37年	なし	道東観光開発株式会社	2,700円	
17	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	April-Oct.	1962	None	Private company	\$ 24.5	
18	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	1~4月	平成3年	なし	道東観光開発株式会社	3,000円	
19	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	Jan.-April	1991	None	Private company	\$ 27.3	
事業未実施の海獣観察適地(数頭程度は除外) Watching location out of services (except haulout sites by a few animals)									
20	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	通年	観察会未実施	観察会未実施	観察会未実施		
21	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	Year-round	観察会未実施, 1970年代までは陸上からの観察地として観光案内に記載	No watching activities, appearance as watching point in guidebook by 1970	観察会未実施		
22	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	November	No watching activities, appearance as watching point in guidebook by 1970	観察会未実施	観察会未実施		
23	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	Dec-Jan.	No watching activities	観察会未実施	観察会未実施		
24	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	11~4月	2003年より稚内市が無料観察小屋設置(11-3月), 宗谷海獣連絡会が観察会主催	観察会未実施	観察会未実施		
25	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	Nov.-April	Set watching cabin by Wakkanai city office from 2003 (November-March)	観察会未実施	観察会未実施		
26	網走沖流氷	遊覧船	ミンククジラ, カマイルカ, シヤチ, トド, ゴマフアザラシ(少)	Nov.-May	No watching activities	観察会未実施	観察会未実施		

*1: 1\$=110円で算出, *2: 観察船は既製デッキを備えた小型船舶, *3: 遊覧船は客室を備えた小型船舶, *4: 観光船は400総噸の船舶で1事業者のみの使用, 引用文献は本文に明記.
*1: 1\$=110yen. *2: watching boat: small vessel with upper deck. *3: sightseeing boat: small vessel with upper deck. *4: sightseeing ship: 400t liner ship own by one operator, citations in the text.

鰭脚類では、ゼニガタアザラシが襟裳岬と厚岸湾の主要な観察対象であり、ともに通年の観察が可能であるが厚岸湾での観察事業は夏季に限られる。風蓮湖では夏季に数頭、冬季に10程度が（青木私信）、野付湾では春から秋に1頭程度が観察される。ゴマフアザラシは風蓮湖で通年、野付湾は春から秋で観察され、それ以外の場所では11～4月を中心に観察される。能取岬は1970年代までは観光案内にも紹介され上陸する姿が陸から観察可能であったが、1980年代から上陸数が減少し1990年代以降はほとんど上陸する姿が見られない。しかし、2000年11月にシーカヤックにより10頭が遊泳する姿を視認している。トドは主に冬季の観察動物で、日本海側の雄冬岬と神威岬、根室海峡（羅臼）で普通に観察される。夏季は、根室海峡（羅臼）と知床（ウトロ側）1でしばしば観察される。オットセイは噴火湾でしばしば観察されているほか、網走沖の氷海でもまれに観察される。なお、本州以南の沿岸に分布しない鰭脚類の観察プログラムは、北海道が国内唯一の実施地域である。

ラッコは襟裳岬でしばしば観察されるほか、ここでは取り上げていないが根室半島先端の納斜布岬周辺でも毎年のように目撃されている（新聞記事）。

開始年次

北海道でのホエールウォッチングは、室蘭市のまちおこしグループ「ルネッサンス」が1992年（平成4）に始めた噴火湾での観察が最初のもので（室蘭 鯨・イルカウォッチング実行委員会1993）、1994年からは根室海峡（標津町）でも事業が開始された（佐藤1998）。根室海峡（羅臼町）のプログラムは当初は複合的な自然観察船であったが、1996年頃からホエールウォッチングを掲げて航行するようになった。

アザラシなど鰭脚類の本格的な観察事業は、1987年にゼニガタアザラシ研究グループと日本自然保護協会が襟裳岬で共同開催した「ゼニガタアザラシ・ウォッチングツアー」（中岡ら1988）として実験的に開始され、1997年には襟裳岬先端にえりも町がビジターセンター「風の館」を設置、室内から望遠鏡による観察が可能となった。道東では、1998年から厚岸湾で遊漁船を使用して大黒島

を巡る定期的な観察事業が開始された（えりもシールクラブ2001）。野付湾では1962年から定期観光船が運行されており、当初は道路状況の悪かった野付半島への渡船機能が主であったが、観光名所のトドワラの浸食が激しくなった1990年代になってアザラシ観察を宣伝し始めた。神威岬でのダイビング事業は10年以上継続されているが、2002年からトド観察を目的に集客するようになり、2004年には新規参入が2社あった（NPO法人アースウィンド、積丹カヤックス）。よって、北海道のアザラシ観察事業は1980年代終わり、ホエールウォッチングは1990年代始め、トド観察は2000年代始めに着手された若い事業であり、現在も拡大傾向にあるといえる。

観察ルール

今回の調査対象のうち観察ルールを定めていたのは噴火湾、厚岸湾、根室海峡（標津町）、神威岬の4か所で、いずれも自主制定の観察ルールを持っていた。野付湾と根室海峡（羅臼）は観察ルールが制定されておらず、実見でもイルカの追い回し、クジラへの急接近、アザラシ上陸地への過度の接近と乗船客による物音による逃避行動などが見られた。

乗客への観察ルールの説明は、噴火湾では乗船前に、根室海峡（標津町）では観察時に行っていた。神威岬のダイビング観察でも事前講習がある。実見したなかでは、鯨類研究者が解説員を務めていた標津町の解説は充実した内容であった。観察事業の実見はしていないが、積丹岬のトド観察事業者はホームページでトドの生態や保護管理の解説を積極的に行なっている。

料金（大人1名）

定期有料事業の大人一人あたりの料金は1,400円（野付湾）、7,500円（根室海峡（標津））と開きがあった。野付湾の遊覧船は映画料金よりも安価で際だつ存在であるが、それを除くと船舶での観察は3,000～10,000円で、2時間の観察では6,000～10,000円と比較的高額なものが多かった。

課題と考察

以上の結果から、現在の北海道の海獣観察事業のうち、観察対象と観察期間に恵まれ、観察方法

も観察船による本格的な事業は、噴火湾と根室海峡（羅臼町）の2か所3事業者のみと結論できる。これら3事業者の観察条件や価格などのサービス水準が北海道での海獣観察事業の今後の基準となると考えられる。一方、野付湾のアザラシ観察船は手頃な価格と時間でありながら、国内唯一の夏季のアザラシ観察適地として注目される。定期航路にとって海獣観察が可能であることは、集客力の向上に寄与していると考えられる。このことは当該事業者がポスターやパンフレットに海獣の写真を用いていることでも明らかである。日本海側では2002年までは観察事業実施が未実施であったが、現在は神威岬の観察事業や抜海漁港の簡易観察施設が整備されつつあり、この地方でも海獣観察の条件整備は進んできている。

以下、おもな課題について考察する。

1. 観察ガイドラインの整備と観察ガイドの乗船
海外の先進地では、観察ルールが定められており（Carlson 2002）、国内でも小笠原や沖縄、高知県等では自主的なルール策定がなされている（木白・森 2000）。北海道ではルールづくりは遅れており、拘束力のあるルール策定はなされていない。

北米では海獣観察プログラムに「生物学者乗船」の有無を示すことがあり、海生哺乳類が専門とは限らないが大学院生の職業体験を兼ねたアルバイトの場となっており、観察情報が個体識別情報など研究蓄積にも役立てられている。観察サービスの向上と生態学的知見の収集の両立がはかられ、一方では大学院生などへの収入源にもなることから、北海道でも実現が期待される。

2. 海獣漁業の制限と総合的な海面利用調整の確立

海獣観察プログラムと競合する海面利用には漁業や船舶の航行が考えられる。実際に北海道で問題となるのは漁業であり、なかでも直接競合するのが海獣漁業である。北海道沿岸で操業されている海獣漁業は、小型捕鯨業、調査捕鯨、イルカ漁業、そして漁業ではないが鰭脚類の猟獲がある。

捕鯨はツチクジラを対象にした小型捕鯨業が網走と函館を基地に操業されており、知床半島沿岸も捕獲場所に含まれている。海獣観察事業との競合は知床半島周辺で発生することが予想されるが、

現在は網走を基地とする捕獲は9月の2頭に制限されていることと、捕獲鯨種が主要な観察対象種ではないため、海獣観察事業への影響は今のところ知られていない。

調査捕鯨はミンククジラの調査捕鯨が2002年から実施され、西暦偶数年は釧路沖、奇数年は宮城県沖で行われる。ミンククジラは北海道の主要な観察鯨種であり、調査捕鯨の実施時期や捕獲海域によれば観察プログラムに影響を与える可能性がある。2002年の釧路での捕獲調査による影響は知られていないが、将来にわたる監視が必要である。

イルカ漁業はイシイルカを対象にした突棒漁業が操業されており、長らく北海道連合海区漁業調整委員会承認漁業であったが、2001年8月から知事許可漁業となった。この漁業には海区承認漁業時代から操業規制があり、海獣観察事業に関係する内容に1) 北海道沿岸5 km以内の操業禁止、2) 噴火湾と室蘭市チキウ岬灯台から半径1 km以内の操業禁止、3) 知事が資源の保護のため必要と認めて操業を制限することの3つがある。これらの規制は沿岸漁業との利用調整が目的で、海獣観察事業との調整は考慮されていない。イシイルカの漁獲は、商業捕鯨の制限強化によって1980年代後半から捕獲が急増し、同時期から知床半島沿岸ではイルカの死体漂着が増加したこと、イルカが船首波に乗る姿が見られなくなったこと、逆に船に近づかなくなったとの証言が斜里と羅臼の漁業関係者や社会教育関係者から得られている。噴火湾近海では、ホエールウオッチング船からイルカ突棒漁船の操業が目撃され、乗客に心理的な苦痛を与えたケースがあり（北海道新聞1996年6月4日第2社会面）、海獣観察事業の脅威となっている。

鰭脚類の猟獲では、アザラシ類の猟獲は年間1万頭にのぼったと推察される1970年代のピーク（宇仁未発表）から激減し、現在は数百頭規模と推測される。しかし、実見ではたった1隻のトド猟船のため近くのアザラシやトドがすべて逃避してしまい、観察会が成立しなくなったケースがあり、同一海域での海獣観察事業と鰭脚類の猟獲は共存しえない。

ホエールウオッチングは海面を利用した経済活動であり、海獣観察事業者にも海面利用の権利を与えることが必要と考える。よって、海獣観察事

業実施海域では問題の大きいイルカ漁業や捕鯨などの海獣漁業、鰭脚類猟獲の制限を考えるべきである。噴火湾ではすでにイルカ漁業が禁止されているので、課題は知床半島周辺での制限であり、具体的にはウトロ港と網走港をイルカ陸揚港の指定から除外することが望まれる。それは世界遺産登録への条件整備にも合致するだろう。

3. 日本海側での観察プログラムの推進

北海道周辺のアザラシの上陸場のうち観察事業が行われているのは襟裳岬以東の道東域に限られていた。近年、日本海への回遊が増加したトドについては、2003年になって神威岬での観察事業が実現したので、アザラシについても上陸地として知られる利尻・礼文、天売・焼尻 (Mizuno et al. 2002) などでの日本海側での観察プログラムの充実が望まれる。

まとめ

海獣観察事業は現在も拡大傾向にあり、環境省が推進するエコツーリズムの実践例として注目される存在である。しかし現実には赤字経営が続くケースもあり (北海道新聞2002年3月15日朝刊室蘭版, 同2002年7月8日夕刊社会面, 2002年3月18日室蘭民報一面), 標津町の(有)千島観光汽船は2002年で事業休止となった。根室海峡では根室から網走までのクルーズ船が計画されたが (北海道新聞2002年8月6日朝刊社会面) 実現には至っていない。

このように北海道で海獣観察事業を経営するのは難しいのが現実といえる。実態調査と資料調査から海獣観察事業の実施条件として、1) 100%に近い確立で海獣が観察できること、2) 魅力ある観察対象が海獣やその他を含め複数あること、3) 観察期間が通年であること、この3点をあげておく。現時点でこの条件を満たしているのは、知床半島周辺海域だけであり、根室海峡単独あるいは夏季に斜里側の観察プログラムを含めた事業展開ならば、海獣観察事業の経営は可能であると考えられる。それ以外の地位では、海獣観察プログラムは、総合的な自然観察事業の魅力増進や観光地のイメージアップに貢献しているといえるだろう。

謝辞

この報告をまとめるにあたり表中に記載した事業者の方には観察状況や事業の情報をいただきました。また佐藤晴子、笹森琴絵、鈴木理恵、水野文子、浅野悠美、石川慎也、中岡利泰、鈴木芳房、青木則幸の各氏には観察情報や報道記事を教えていただきました。お礼申し上げます (順不同)。実態調査はノーステック財団「研究開発支援事業」の補助を受け行いました。重ねてお礼申し上げます。

引用文献

- えりもシールクラブ. 2001. えりもアザラシフォーラム報告書. 61pp.
- 木白俊哉・森恭一. 2000. ホエールウォッチング・ガイドライン. 加藤秀弘編著, ニタリクジラの自然誌. pp283-303. 平凡社, 東京.
- 佐藤晴子. 1998. 豊かな環境に支えられたクジラやイルカの通り道. サイアス49: 78-81.
- 中岡利泰・永田耕一・石川慎也・池上洋子. 1988. 自然教育資源としてのゼニガタアザラシ—1987年ウォッチングツアーについて—. 知床博物館研究報告9: 67-72.
- 北海道未来総合研究所. 1999. 通商産業省委託調査平成10年度ゆとりと豊かさ創造型サービス産業振興指針作成事業「北海道地域における観光関連産業の新潮流と今後の発展方策に関する調査研究」報告書. 北海道未来総合研究所. 158pp.
- 室蘭 鯨・イルカウォッチング実行委員会. 1993. 地球岬沖を回遊する鯨—室蘭の鯨・イルカウォッチング報告書—. 44pp.
- Carlson C. 2002. A review of whale watch guidelines and regulations around the world version 2001. IWC SC/53/W4.
- Mizuno A. W., Suzuki M. & Ohtaishi N. 2002. Distribution of the spotted seal *Phoca largha* along the coast of Hokkaido, Japan. *Mammal Study*26: 109-118.